

人間性の涵養

(五)

倉橋惣二

人の感情に同するに、歎びを共にすると、悲しみを一つにするにある。人の憂に先んじて憂え、人の歎びにおいて歎ぶを君子の共感とするといふ。先憂後樂の語ある所以だそうである。しかし斯くの如きは達人のこと、凡人としては、他と共に歎び、他と共に悲しむの共感を以て、人間相互のことよし、常人の人間性とすべきか。しかも、他と歎びを一つにし、悲しみを一つにするに、必ずしも万人同じでない。所以同情という言葉は、後者を意味せられることが多い。歎びを頗つは容易にして、われも亦幸福である。悲しみを頗つは、容易ならずしてわれは快でない。そこに、道徳的意味を以ての同情の通念とするの觀があり、我れ持てり、人持たざるとき相頗つ(すなわち、我れを犠牲にする)同情の美德とする。

しかも、人の歎びと幸福に同するも亦、人間性そのものとしての美であるまいか。人の不幸にのみ同情し得て、人の幸に同情し得ないことは、純なる人間性として偏するもの、不自然のものというべきか。道徳的意味の同情は心理的にはすべて先ず他人のミットフューレング(音感)に愛することであるが、人の苦痛にミットフューレンする場合をのみ同情の徳とするは、古来、難きを道徳の価値とする、一種の不自然癖に出するものであろうか。自然的完たさを以て貴しとするわれらの、同じ難きところである。また強く道徳を説かずして、人間性の平凡を説く所以でもある。難きにおいて自己修養するも人間必要のことでもあろう。しかし、先ず養うべきは、人間の自然性の豊かなることであるまいか殊に、その生活の自然味において勝れている幼児期の教育において。

道徳的に生きることを、自ら強い、幼児に求むることをのみ事とする教師は幼児を不自然の道徳行者に育てゝ人生の楽しさの外におこうとするものである。幼児をし

て、初めから人生の学理に苦しましめるものである。真に健全の教育といえようが。他と共に悲しむことを教えるて、他と共に歎くことを養われない幼児の生活は、呪わるべきかな。

人間性は、特に教えるべく、余りに自然である。自然を以て自然を養うを涵養といふ。幼児はやさしい先生が自分に共感して下さる（敢て同情でなく）のを経験して自分も亦、共感の自然の快感を覚える。一般に、愛される経験によつて、他を愛するに到るは人間教育といふものゝ自然であるが、斯くて、人間的すなおさが曲げられず育てられるものである。特に教説せられるのでなく、勧説せられるのでなく、それを、自分の心に会得して而して、或は、それは善きことなる故に自らも行なうとするのでなく（年長な青年にその方法は適用せられ有効でもあらう）自ら受くることによつて、我れに体験するおのづから他に対しても体験されるのである。教育も亦楽しいかな。かくて、教師の如く教育せられる。教育の真実性とは斯くの如きをいうか。

近世の教育は、自發を説く。人間性の教育も亦、自發によること多きはいふまでもない。しかも、教育せんと

して工夫工作せられるものにあつては、自發を妨げられないとも限らない。工夫せられた先生の努力でなく、先生の自然の人間性から涵養せられるのである。人間は人間の中に居て人間になる。幼稚園は、先生と友達——人間間に友達によつた人間性を涵養せられるのである。幼稚園の幼き友達は特に道徳でなく、豊富なる、淡々たる人間性の交りを以て、互の人間性を涵養する。一方的感化などではないから、特に感謝すべきでもあるまいが人間的 take and giving の間に、どちらからということもなく教養せられる。而して、その与えられるところはいずれか多きが知らないのである。樂しいかな幼稚園。池のさゞなみの、よせてはかえつゝ、互を快く、さゞなみ立てる様に、その池面に美しく、さゞなみだたせるもとは先生の春風である。その春風はどこの岸からか知らないが、先生のやさしさがおからであることもある。やさしい声からであることもあらう。そうして近波おのづから、全池に及ぶのである。樂しいかな幼稚園。

書き終つて省みれば、人間としてなんでもない自然の人間性を、言だて過ぎた感がある。恥かしい。しかし、人間性の涵養は、こうして識らない間に幼稚園で行われてゐるのである。樂しいかな幼稚園、幸なるかな幼稚園の先生。（終り）